

なのはな通信

第3号 1999.12



編集・発行

勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪409

TEL 0471-58-9955 FAX 0471-59-7055

発行責任者 小澤 清子



ワイイ 万里の長城だ！

日本の未来を担う若者たち

学校長 石田 一宏

日本はどのように変わっていくのだろうか。戦後五十年になっても真の民主主義が定着せず、逆に今また戦争勢力が、前大戦の亡霊をひきつり出し、日本の若者の将来に暗雲をひらめようとしている。

それに対して、日本の未来を背負う若者たちの多くは、消費文明の中に翻弄され、深く探究したり思考する訓練をうけていない。そして、自分たちの将来について強い意志を育てていないように思う。彼らは、教えられた知識だけでわかっているような気持になりがちだ。そして深く知ることの喜びを経験していない。

本校の「まず現実にはぶつかって考え、理解する」という指導は、いままでもそんな方法論を経験したことのない学生たちにとって新鮮だ。

本校の研修旅行のテーマは、毎年「憲法と平和と医療」であるが、それも、ビデオや文献で学習するだけでなく現地で見、聴き、考えることを大切にしている。いままでも、沖繩、松代などに行き、天皇制のもとで、いかに国民が戦争にまきこまれていったかを、自分たちの目で見、心に感じたのであった。そして、「事実を見る」「自分の頭で考える」ことの大切さをひとりひとりが確認していったのである。

今年の一科三年生の研修旅行は、中国であった。はじめての外国への研修であるので私も同行した。北京、南京、上海と強行軍であったが、学生たちの心はとてもオープンだった。博物館や資料館での展示物や、南京大虐殺の生き証人のお話などが、しみ透るように理解できたのだった。事前学習を充分してきたことも意味があったと思うが、事前学習はあくまでも字面の理解。それが、中国の当事者たちから語られるとき、心の中にしみわたる、事前学習のさまざまな言葉がしっかりと結びついて、日本軍が中国大陸でおこなった侵略行為すべてを、理解できたのだった。

こういう学習を通じて、本当に戦争について考え、平和を求める運動の大切さを実感するのである。

本校の研修旅行のような体験を通じて自分の将来をきめる若者がいることに、私は、日本の未来に希望を見出したいと思うのである。

第2期学生 自治会総会

1999.9.3

四月にこの学校に入学し、学生が主人公で自分が学びたいように学ぶ学校だと実感しています。私のこの意見に対していろいろな学生の意見もあります。学校生活が環境も含めてよりよくなるため、どんな小さな意見も考えていきたいと思えます。私達のこの学校生活が、国家試験のための単なる通過点ではなく、これから生きていく上で、大切に楽しい思い出となるようにと考えています。これだけ年齢層をこえた学校はありません。いろいろな出会いがあり、人は成長できるのだと思います。学年、科を越えて結びつきみんなが気楽に声をかけられるような雰囲気のある学校にしたいです。

一部の限られたものの意見だけで

はなく、当然のことですが、かたよりなくいろいろな意見があつてこそ活性化できるし、成長できます。その様々な意見を守りたいし、保障したいと考えています。自分達自身も自治会活動と共に成長していきたいと思えます。

(自治会会長 前田 梨絵)



第2期自治会活動方針

- 一、「自分達の学校」をより良くして行くと共に、学生相互の交流と団結を目指す。
- 二、学生の切実な要求を発展及び実現する為に、学生一人ひとりの意見を集約し、要請する。
- 三、学生全員の、積極的な活動の基盤となる自治会を目指す。
- 四、各クラスの役員及び各サークルの代表との結びつきを深め、自治会活動の活性化を目指す。
- 五、自主的・民主的な文化・スポーツ活動の発展を目指す。

第2期自治会役員紹介

会長	前田 梨絵	(2科1年)
副会長	島崎 真理	(2科1年)
書記	加藤 学実	(1科1年)
	中島 美貴子	(1科1年)
	椛山 樹里	(1科1年)
	加辺 伸子	(1科1年)
	佐藤 和美	(1科1年)
	清水 宣行	(1科2年)
	菅野 桂子	(1科2年)
	蓮場 隆代	(1科2年)
	吉田 拓生	(1科2年)
	志田 ちひろ	(1科1年)
	高橋 奈津子	(1科1年)
会計監査		



第5回 東葛祭

1999.10.2～3

十月二・三日（土・日）「第5回東葛祭」が行われました。一人ひとりが主役になること、地域の方々も楽しめることという主旨のもとに取り組み、約四〇〇名が参加。

二日に行われた「学びの発表」は、各クラス、教員が今迄学んできたこ



とを発表し合うことで、「地域に住む人達との交流の様子や啓蒙活動を通し患者と共に学んだこと」を聞くことができても勉強になりました。みさと協立病院精神科医である中沢正夫

先生による「現代の自立を考える」三〇にして立たず」の講演が行われ、「自立できない人は、見放す」という方法が良い事を述べていました。たしかに今は、過保護の家庭が多く面倒を見てしまうから、自分では何も出来なくなってしまうのだと同感しました。

三日は、「指圧」歌う手話コーナー、フリーマーケット、「平和ゼミ」、おばけ屋敷、子どもむけアトラクション、クラブカフェ、模擬店と多彩。石田校長の「臓器移植をどう考えるか」の講演も講評でした。「全学年が交流をもてるように」と縦割りというかたちにして各々担当を決めたのですが、各科、各学年それぞれ実習期間が異なっていた為、準備を進めていくことが難しかったです。しかし、そんな中でも力を合わせたことで、東葛祭を成功させることができました。

私は、この学校に入って東葛祭実行委員会という重責を担いすごく不安でしたが、無事終えることができました。

て良かったです。これも共に協力してくれた仲間、講師の先生方がいたからこそだと思っています。

（第5回東葛祭実行委員長

豊田 恵里）



基礎Ⅱ実習 の学び

誰一人として居眠りする事なく、逆に学生達の顔は晴ればれとしており、達成感を持つているように感じられました。

だけが看護ではない。観察をして、患者さんを見守る事も看護なんだと学んだ。」

「今回の実習は、学内で練習した清拭や洗髪技術をしに行くというよ

うな思いがあった。しかしそれは違うという事がわかった。」

「観察なくして、看護はありえない。そして疾患な観察は出来ない。もつと勉強しなくてはいけないと思った。」

「患者さんの立場に立つという事は、患者さんの状況に自分を置き変えるという事ではない。患者さんの

生き方や背景を含めて考えていく事だと学んだ。」

学生達が患者さんから学んだ事。まさに、事実をありのままにつかむ中から学んだ事は、何度机上で学習したからといって身につくものではない。学生の生き生きとした学びの中から、私自身が学ばされた事でもありました。

4月に本校に入学し、高校迄の教育では行つてこなかったグループでの学び合い。はじめは戸惑い、ストレスを感じグループがあるなら学校へ行きたくないとまで言っていました。しかし、今回のレポートを、次のようにまとめている学生達がいました。

「グループワークの時間が短かつたなかでの考察をまとめていくうえで結論を出すまでに何度もいきずまり、感情的になつてしまつた部分もあつた。しかし結果としてそのいきずまりが私達を一步成長させてくれたように思えた・・・。」

学生の成長の源は患者さんであり、それを一人でなく仲間と学び合う事が大事である。これが、私がゼミで確信をもつた事です。

「清拭や足浴などの技術を行なう事

者さんの立場に立つた看護は出来ない

（1科一年担任 熊谷 かおる）

「私も今の意見に賛成します。私も患者さんから同じ学びをしました。」

基礎Ⅱ実習のクラスゼミは、こんな一言から始まりました。その後も仲間の学びを共有しつつ、活発な意見交換が交わされていきました。そしてレポート発表中教室は静まりかえり、クラス全員が仲間の発表を一言も聞きもらさないぞという姿勢がひしひしと伝わってきました。学生達はレポート作成の為に、連日夜遅くまで学校に残り疲労もピークに達しているはず。昨夜も2時すぎまでレポートを書いていたはずなのに……



「生命活動の探究」の学び

方々の応援で成長していることを実感した。

このことを土台としながら、一年次後期の教育活動の大きな柱である、「生命活動の探究」にとりくみました。「系統別組織の相互関係を科学する」サブテーマのもとに人間が健康に生きようとする素晴らしい自然の治癒力、予備力、生命力をもっていることをグループで追求します。人間の身体を8つの系に分け、各課題テーマに挑戦し、一ヶ月半の期間をかけたまとめを発表します。

5期生より、看護教育制度カリキュラム改訂による新カリキュラムで学んでいます。その改訂の柱の一つである「在宅看護論」のテーマで、4月、「地域の患者さんの生の声から、人生、健康、医療についてお聞きし看護について考えていこう」と訪問を軸に合宿研修を行った。

続いて7月、「住民にとつての地方行政と地域医療、看護の役割について考える」をテーマに4回の訪問を行った。これら、「地域フィールド」の学びを通して学生達が、地域で生活する患者さんから事実をありのままにとらえる大事さを学び、地域の

今までの「覚える」学習法から一変した「学ぶとは？」を求められるある意味では苛酷な学習形態である。「生命150億年の歴史」、「猿が人間になるについての労働の役割」、「生命の基本単位は細胞」の事前学習とともに、解剖学、生理学、生化学の基礎学習を徹底していきます。集団で学習することは最も苦手とする学生達であるが丁寧に応援していくことで、分担主義、個人学習では「わからないところすらわからない」ことに気付いていきます。

併行してリーダー会議を組織し、全身と各組織、臓器のつながりを明らかにし、グループの進捗を全体で確認していくことで学習が集団化し

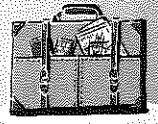
ていきます。集団で個々の素朴な疑問、例えば、口から入った栄養素は小腸の絨毛からなぜ動脈に入らず静脈に入るの？、どうして脂肪はリンパ循環に入るの？などを大切にして話しあい、文献にあたることで少しづつ組織、臓器の働きとそのつながりがみえてきます。学生は先輩のレポートに首つびきになり、VTRを昼食時間も惜しんで何度も見たり、基礎学習ノートも数冊ビッシリ書き込み学習します。その上での「論戦」により「なぜ」を深め、しっかりとした「討議」の意義をつかんでいきました。何をやるの、どうしたらいいかわからない当初の不安から、集団で学習する方が一人でやるよりわかる、学びが楽しいに変わります。また、人間の生命活動のすごさがわかると、自分の身体のとおりおもしろい、今までうつつとおもしろいと思っていなかった帯下も大切な機能をもっていることがわかり嬉しくなりました。」と人間観、健康観の発展となる。個々の学びを結集するリーダーの役割について仲間より指摘され奮起しやりとげる学生の力強さや、生命活動の学びを啓蒙していくには自分がかかりわかっていないと伝えられないことも学びました。これらの学びをも

つて臨んだ患者さんに密着する基礎実習では、「患者さんに負けないように共に学び、実習が楽しい」と頑張っています。これからの楽しみです。5期生の学びを通して1期生からの学びが確実に受け継がれ、蓄積され「事実から学ぶ」校風、伝統となっていることを実感しています。

（2科一年担任 徳丸 美津子）



平和と医療



1科3期生 中国へ

今回、研修旅行へ行く前に授業や事前学習でビデオや資料をもとに学んでいたが、研修旅行へ行って改めて戦争の恐ろしさを知った。盧溝橋の中国人民抗日戦争記念館では地下道が再現されており、恐怖心を抱えながら過ごしていたと思うところを再現した蠟人形は人として扱っていない様子が伝わってきた。2日後に見学した侵華日軍南京大虐殺同胞記念館では、自然と笑うということとを忘れた時間を過ごした。黙祷の

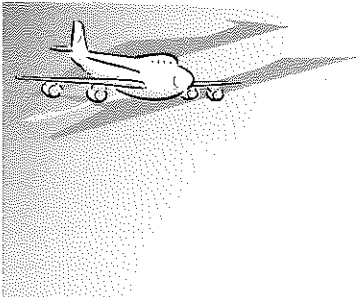


時、「この地が戦場だったのだ」と改めて感じていた。本当にあったことなのか：まだ信じられない、信じたくない自分がいた。この記念館が設立十五年目で見学者は七〇〇万人、うち日本からは二十万人と聞き、日本人の来館者が少ないと感じた。生存者の倪さんよりお話を伺う。家族や知人が目の前で殺されたり、遺体で積み重なってできた橋を見たりしたらおそらく自分は気が狂うだろうと思った。庭に出て、小さな敷き詰められた石が白骨をイメージしたもの聞いたとき、それが本当に頭蓋骨に見えてきた。遺骨陳列館の骨一つ一つすべてが本物で、この夏敷地内で二〇〇体もの遺骨が発掘されたことを思うと遺骨の前で動けなくなりそうだった。この記念館の下にあと何人もの骨があるのだろう。何人もの悲しみや苦しみが埋まっているのだろう。そんなことを考えながら一步一步ゆつくりと歩いた。記念館は、日本の原爆ドームや資料館とは全然違う。事実をすべて・・・といった感じだった。事実を見つめること、それが第一歩なんだと思った。



い。戦争が再び起こるか否かはこれから二十一世紀に生きる国民のすべてにかかっていると云ってよいだろう。現在日本が一步一步戦争勃発への道に進んでいることを国民が認識するためには私は一人でも多くの人に知っている限りのことを伝えていきたい。

(1科3期生 吉田 かずみ)



研修旅行

日本国憲法と

2科4期生 沖縄へ

看護学総論の一環として日本の平和と医療を科学し、二十一世紀における日本の看護者としての役割を考えるを目的に事前学習から学びを進めてきた。はじめは「ガイドライン」「安保条約」について何故学習するのかと思った。事前学習会で発表し学び合うなか、戦争の恐ろしさや人間の生命の大切さを知らされない教育、マスコミに問題意識を持った。そのため戦争に対して他の国がやっていることと関心が薄い社会になっている。戦争法案であるガイドラインと



いうことがわかり大変な事だと思つた。また、正しい戦争なんてないと思つた。

この事前学習を学び地上戦のあつた沖縄に行き戦争の実相を知り、また、沖縄の基地と安保条約について日本全体の問題として考えていきたいと研修旅行の場所をクラスで決めていった。

沖縄に行き基地の中の沖縄と感じた。民家や学校が基地と隣り合わせになっている。戦闘機のすごい爆音を聞き驚いた。そして、少女暴行事件、交通事故などで米軍が正当に裁かれない事実を知り、怒りをもって基地があることでの被害問題を深刻に考えた。また、沖縄のきれいな海を埋め立てて基地建設を進めようとしていたり、実弾訓練など自然を破壊しつづけていた。

戦争での犠牲者は住民であつた。平和資料館やひめゆり平和祈念資料館等での生々しい手記を見て戦争の重みと知らされなかつた真実を知ることができた。米軍にやられただけでなく日本兵にスパイの容疑で殺されたり、壕の中で泣く子供を殺したり、実際に壕の中で暗闇体験を行い五十四年前に実際に起こつた事が信じられなかつた。集団自決は皇民化教育のものとの集団殺人で教育の恐ろしさを感じた。

研修報告会は、中国研修旅行に行

つた1科3年生と合同で行つた。中国研修報告で、侵略戦争の実相を初めて知りとても辛かつた。沖縄では二〇〇〇年のサミットに向けて準備が進められていた。平和資料館改ざん問題では、事実を歪めていくことや安保の見える丘に壁を作り中が見えなくする等、政府のやり方に許せない気ちであつた。怖いのは真実を知らされないことである。この学びを次世代に伝え二度と戦争を起してはならないと感じた。そして、平和な未来にしたい。

(2科4期生 中村 孝徳)



1999年度教育活動（今後の予定）

	学校行事	1科1年(5期生)	1科2年(4期生)	1科3年(3期生)	2科1年(5期生)	2科2年(4期生)
1月	7日 1科推薦入学試験 10日 始業 28~29日 1科I期入学試験	24~2/11日 基礎Ⅲ実習	10~21日 各論Ⅲ実習		基礎実習 シンポジウム	
2月	4~5日 2科入学試験		7日 地域フィールド事前訪問 21~23日 地域フィールド	27日 看護婦国家試験		27日 看護婦国家試験
3月	4日 第3回卒業式 7~8日 1科II期入学試験 18~4/6日 春期休暇	基礎Ⅲ実習 発表				

ごくろうさま



何時の日にかこの様な文を書く事が避けられないと思いつつも、現実には「いざ」と直面した今、語り尽くせぬ様々な思いが去来しています。

本校に関わりを持ったのが九十二年四月に看学設立プロジェクトの一員として開設準備を始めて以来です。当時から、七年半を学校と共に過ごした事になります。必然だった看護学校開設準備を進めるか否かは大きな決断を要する事項でした。緊迫した決定会議を思い出しますが、地域医療に貢献する固い決意を込めて本校の歴史の扉が開かれたのでした。

在任中は皆さんから沢山の贈り物を頂きました。開校して、必ずしも将来を単純に期待出来ない現実の中で、いつも驚かされる新鮮な変化と成長を遂げる学生たちの姿に明るい未来を見る事が出来、励まされてきました。学生たちは本校の主人公として歴史を創っています。この学生たちの実践を通じて人間の限らない可能性を学んだのでした。又、全国の医療現場等で働いている卒業生の頑張っている様子を見聞きし嬉しく励まされます。この仕事に関われた事の幸せに包まれる瞬間の一つです。これらは私の終生の宝物になるでしょう。

部署は変わりましたが、在任中に頂いた沢山の宝物を力に、皆さんと私達の輝かしい未来の実現の為に頑張っていきたいと思えます。終わりに、皆さんの健康を祈念し、更なる勉強の深化を期待しています。

（退任事務長 長谷川 壮俊）

編集後記

この秋、学生たちは、机上学習に、実習に、研修旅行に、合宿にと全力で取り組みながら、九月に第二期自治会総会、十月初め第五回東葛祭に各科・クラスを越えてエネルギーを燃やしました。学びの内容はほんの一部ですが、この「なのはな通信」が参考になればと思っています。さて、来年度からの介護保険実施を前に医療・看護をとりまく状況は厳しいものがあります。看護教育の分野でも、看護学生への奨学金を二〇〇床以上の病院に就職する場合の奨学金全額返済や、育英会奨励金の有利息化、学校補助金の削減、又、いまだに看護婦の供給不足があるにもかかわらず看護学校の廃止や統廃合など、看護を学ぶ権利が奪われてきています。このような状況のなかで学んでいる学生たちですが、時にはつまずいたり転んだりしながらも、患者さんや先輩たちから多くのことを学び成長しています。これからも暖かいご指導・ご援助をよろしくお願いします。

学校通信編集委員会

江島典子、二瓶幸江、小澤清子